Y1-5
フィリピン地域保健医療支援事業での戸別訪問調査

名古屋第二赤十字病院　国際医療救援部
○西口（にしぐち）　佐世子（さよこ）、山之内　千絵、白子　順子、
伊藤　明子

【はじめに】日本赤十字社はフィリピン赤十字社との二か国間事業として、2005年からフィリピン共和国キリノ州において、地域保健医療支援事業を開始した。演者は本事業の第二期事業地である同州アグリーパイ郡において事業対象である9村落で活動し、事業開始に伴う基礎調査の一環として戸別訪問調査を行った。
【活動と結果】本事業の目的は、村落ヘルスワーカー等の人材育成及び対象村落の住民に最低限必要な保健医療サービスを提供することであり、そのために戸別訪問調査により現状把握を行なった。調査者は4チームで（1チーム医療スタッフ1～2人、ボランティア・ヘルスワーカー1～2人で構成）、3村、各50～80世帯を訪問した。調査は、調査シートに基づき、世帯の家族構成、衛生環境に関する情報（トイレと水源の共有状況、距離など）、健康保健管理に関する情報（予防接種状況、家族の病歴、現在の健康状態、病院に受診する場合の費用と所要時間等）を村民から直接聴取した。戸別訪問調査を行うことにより、村落の行政レベルでは得られなかった詳細な情報を得ることができた。
【考察】ボランティア・ヘルスワーカーに調査の仕方を指導しながらの戸別訪問であったが、彼らは村落にとっては大きな存在であり、保健医療において村落に大きな利益をもたらすため、彼らのモチベーションを引き出し・維持しながらボランティアを育成することが、いかに重要であるかを認識した。また、村民であるボランティア・ヘルスワーカーを通して、その地域の文化を知る事ができ、彼らから現地の人達との関り方を学んだ。

Y1-6
フィリピン国際保健医療支援事業活動報告

武蔵野赤十字病院　看護部
○梅野（うめの）　幸恵（ゆきえ）

【はじめに】私は、2008年1月～7月まで、フィリピン共和国キリノ州ナグティプナン郡で、フィリピン赤十字社と日本赤十字社の国際協力活動でプライマリーヘルスケアプロジェクトに関わった。初めての経験であったことから活動を振り返り考察したので報告する。
【フィールドの紹介】ナグティプナン郡7村249世帯の内160（約64％）はトイレがなく、川や水源の近くで排泄をしていた。また生活用水や飲料水に起因する、腸チフス、下痢を発症し、脱水の結果死亡することもあった。
【実際の活動】私の活動の目的は、どのバランガイヘルスワーカー（以下BHW）が講習会を開いても、住民が自宅にトイレを整備する必要性を理解し遂行できるよう効果的に同じ内容で教育を行えることであった。最初に、BHWの活動状況を把握するため、6村を巡回した。その結果、健康教育資材の不足、BHWの経験年数と講義方法の個人差が明らかになった。その状況からBHWの健康教育講習の技術向上に重点を置く必要があると考えた。そこで、腸チフスの症状、治療、予防方法、家庭での看護方法を一連のスライドにし、紙芝居形式にした。特に重視して検討を重ねたこととして、聴衆の関心や注意を引くために読み方に工夫が出来るよう、声のトーンを変えたり間をおくなど、裏面に注意書きを加えた。その上で、誰でも理解できるよう、協力を得て、タガログ語に翻訳した。対象7村に配布した。
【活動の結果】この教材を使用した結果、すべてのBHWの健康教育の内容と方法が統一され、住民はBHWのレベルに左右されない健康教育を受けることができるようになった。自宅にトイレの整備を受ける世帯の代表者は、この教材を使用した腸チフスの健康教育を受けることが務付けられた。住民達は集中し興味深そうに聴講していた。またそれを見てBHWのモチベーションがあがった様子が伺えた。